氏　　名	佐藤淳一（サトウ ジュンイチ）
学位の種類	博　士　（音　楽）
学位記番号	博　音　第 207 号
学位授与年月日	平成24年 3 月26日
学位論文等題目	〈論文〉ルチアーノ・ベリオ論－注釈技法の研究とその起源を巡って－ 〈演奏〉Lベリオ　シュマンⅣ　Chemins Ⅳ per sassofono soprano e 11archi コントラプンクトゥスXIX（フーガの技法） Contrapunctus XIX （Die Kunst der Fuge）for 23players カンティクム・ノヴィッシミ・テスタメンティ Cunticum Novissimi Testamenti per quattro clarinetti, quartetto di saxofoni e otto voci レシ（シュマンⅦ） Récit（CheminsⅦ）per sassofono alto e orchestra
総合審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（音楽学部）　山本正治
（副査）	〃　〃　（　〃　）　小畑善昭
	〃　准教授　（　〃　）　福中冬子
	〃　非常勤講師　平野公崇

（論文内容の要旨）

ルチアーノ・ベリオ Luciano Berio（1925-2003）はイタリアを代表する作曲家の一人であり、ピエール・ブーレーズやカールハインツ・シュトックハウゼンらと並び戦後の現代音楽の牽引者であった。19世紀におけるイタリア音楽史は、オペラの歴史そのものであったが、そうした時代のちょうど終焉を迎えた20世紀初頭にベリオは生を受けた。ベリオは現代におけるオペラの作曲を否定し、イタリアの伝統的な歌唱法であるベル・カント唱法も好きではないと述べるが、彼は20世紀のどの作曲家よりも声を扱った作品を得意としていた。またオペラからの逸脱を図った音楽劇に生涯にわたってこだわるなど、従来のイタリア音楽からの脱却を図り続けたものの、その本質は誰よりもイタリア音楽を体現していたといえる。ベリオは伝統を大切にし、その脈々と培われてきた伝統に対して、彼自らの解釈を加え現代の言葉に翻訳し、作品として生み出していった。ベリオはこうした作曲法を「注釈技法 Commentary Technic」と述べ、以下のように定義する。

作品とは、前に現れたもの、そしてこれから現れるものの注釈である。それはまるで、答えも注釈も生み出さない問いのようなものであり、また別の問いのようなものである。

本論ではまずベリオの生涯に焦点をあてる。1920年代の生まれというのは非常に優秀な作曲家が多く、ベリオと同じ1925年にはピエール・ブーレーズが生まれ、その３年後にはカールハインツ・シュトックハウゼンが生まれている。彼らの半生を追うことは、それがそのまま第二次大戦後の音楽史そのものになる。戦後に新しい作曲技法がめまぐるしく入れ替わり立ち替わりする中で、ベリオはそのトレンドとどう向き合い取り入れていったのか、またそこからどの様に彼自身の独自性を築いていったのかを探求

するための章である。

二章はベリオが提唱し続けてきた注釈技法そのものに焦点をあてる。彼の注釈技法を「編曲」「引用」「拡大」と分類し、それぞれの分類においてどのように注釈が行われているのかを分析する。また彼の作品リストから､それらがどの注釈技法を使って作曲されているかも同時にリストアップし体系立てる。

三章はサクソフォン奏者である私自身がベリオ作品への注釈を施した章となっている。ベリオは常々音楽に対する分析の必要性を説いており、私自身もベリオの《セクエンツァ》を分析することでそれを体現した。また同時にベリオとともに行動し彼のことをよく知る人物であるクロード・ドゥラングル氏へインタビューしベリオの実像に迫っている。

四章はベリオを巡る旅である。私は文字通り旅をした。ベリオは自身の人生を航海になぞらえ、その旅は「帰るべき故郷がない旅だった」と述べる。それはどういう意味であったのだろうか？私はその発言がベリオの注釈技法の鍵になっていると思い、実際にベリオの人生をなぞるために、彼の生まれ故郷であるオネリアと終着地のラディコンドリを訪ねた。片方は海の町であり、もう片方は山の中の町であり、それぞれの土地は一見全く違うように見えたが、実は両者は「オリーブ」というキーワードで結ばれており、そのキーワードを元にベリオの注釈技法の起源を考察することが出来た。そこにはベリオのリグリア人としての気質も大きく関わっている。

分析というアプローチと彼の本質を探る旅をするという二つのアプローチを経ることにより、ベリオの注釈技法が、人としての彼のどの要素に由来しているのかを明確にするのが本論の主旨である。

（総合審査結果の要旨）

『ルチアーノ・ベリオ論－注釈技法の研究とその起源を巡って－』と題された本論文はルチアーノ・ベリオの注釈技法の起源を求めて、ベリオの生涯と注釈技法を研究している。

注釈技法の先行研究はいくつかあるが、本論文は注釈技法に対して俯瞰的にアプローチし、その体系を分類する事により全体像を明確にしようと試みている。本論文の独自性として挙げられる点はベリオの注釈技法の総括のみならず、人としてのベリオにも焦点を当てている点である。

第１章では、ベリオの音楽家として生涯を研究し、第４章では佐藤氏自身がベリオの生まれたイタリア・オネリアや最後に暮らしたラディコンドリを訪れベリオの生きた痕跡を探った。この事でベリオを取り巻いた様々な環境や民族性が明らかになり、そこにベリオの注釈技法の起源があると佐藤氏は結論を示している。

第２章では注釈技法の分類、ルチアーノ・ベリオへの注釈と題された第３章では、佐藤氏自身がベリオに対してサクソフォン奏者として、ベリオに対して注釈を行っている。

《セクエンツァⅦb》と《セクエンツァＩＸb》楽曲分析を行っているが、複雑な分岐を持つベリオの注釈技法をサクソフォン奏者として、一音一音詳しく検証し、見事に注釈している。この注釈をする為に佐藤氏は人としてのベリオを知る必要がありと考え第４章の旅をして少しでもベリオを理解しようとした。

第３章、３.では自らスイス、バーゼルのパウル・ザッハー財団に資料研究に出向き、《レシ・シュマンⅦ》の手稿譜と印刷譜の相違点を巡る考察も展開している。

博士演奏会で《シュマンⅣb》《レシ（シュマンⅦ)》ではセクエンツァとシュマンにおける注釈技法を、《コントラプンクトゥスＸⅨ（フーガの技法)》では注釈技法における編曲を、《カンティクム・ノヴィッシミ・テスタメンティ》では詩への注釈、響きの注釈等、注釈技法における様々な変容について論文で研究した成果を演奏した。演奏自体、共演者も含め極めて質の高い演奏で、ベリオの注釈技法の世界を見事に表現した。

本論文はベリオ関係の資料研究にも大きな貢献を果たすものと思う。論文の内容、演奏会の質の高さ

を総合的に判断し、申請者は博士の学位を授与されるに十分値する価値があると審査員一同一致し、最高位の成績で合格するとした。